

“ぶつからない”親子関係

～中高生の生活と意識調査から～

世論調査研究員 荒牧 央



世論調査部が8・9月に実施した「中学生・高校生の生活と意識」調査は、82年に第1回目の調査を行ってから20年になります。その間、中高生と親との関係はどのように変わってきたのでしょうか。分析の結果、親の意識の変化を背景として、親子の対立が少なくなっていることがわかりました。また、子どもの自主性を尊重したいという考えも親に定着しています。

<調査の概要>

調査相手：全国の中高生の年代
(1984年4月2日～1990年4月1日生まれ)の男女1,800人とその父母
調査時期：8月23日(金)～9月1日(日)
調査方法：中高生 個人面接法
 父母 配付回収法
調査有効数：中高生 1,341人(74.5%)
(率) 父親 1,209人(67.2%)
 母親 1,366人(75.9%)

図1 どういう親か



親は40代が中心

この調査では、調査相手となった中高生の父母に対しても調査を実施しています。父親の平均年齢は47歳、母親の平均年齢は44歳で、父親の66%、母親の75%が40代でした。現在40代の人生まれ年は、1953年から1962年になります。中高生の親の多くは、日本が高度経済成長期を経て経済大国になる時期に青年期を過ぎた世代ということになります。

学歴では父親の43%、母親の41%が短大または高専以上の学校を卒業しています。短大・高専卒以上は82年には父親で19%、母親で10%でしたが、今回は4割を超え、以前より高学歴になっています。



「きびしい」親の減少

親はどう子どもに接しているのか、中高生、父母それぞれに聞いた結果を図1でみてみましょう。中高生の回答をみると、父親、母親のいずれも「子どもに対してきびしい」や「勉強や成績についてうるさく言う」はあまり多くなく、「子どものことをよくわかっている」親や「子どもにいろいろなことを話す」親、「子どもに対してやさしくあたたかい」親が多いことがわかります。また、父親と母親を比較すると、「子どもにいろいろなことを話す」と「勉強や成績のことうるさく言う」では母親のほうがかなり多く、子どもとのコミュニケーションが父親より母親で多いことを示していると思われれます。

中高生と親では調査方法が異なりますが、親自身の回答も、中高生からみた評

価とおおむね一致しているといえるでしょう。唯一違っているのは「子どものことをよくわかっている」で、親が思っている以上に、子どもは理解されていると受け止めているようです。

この結果を20年前の82年と比較してみると、大きく変化している項目があります。父親では「子どものことをよくわかっている」(55%→32%)、母親では「子どものことをよくわかっている」(70%→51%)、中高生では「父親は子どもに対してきびしい」(37%→20%)と「母親は子どもに対してきびしい」(48%→34%)がいずれも10%以上減少しています。つまり、20年前と比べて親は子どものことがよくわからないと感じるようになり、一方子どもは親がきびしくないと感じるようになってきているのです。

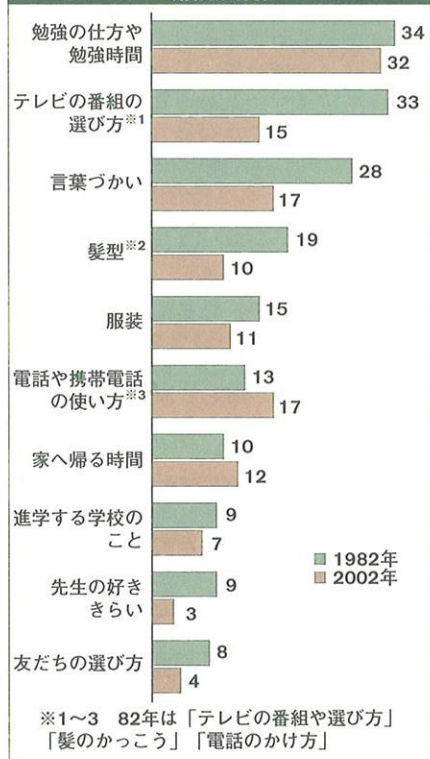
このことは親が子どもに対して自信を失い、その結果子どもにきびしく接することができなくなったということの意味しているのでしょうか。しかし今回の結果からは、親が「子どものことをよくわかっている」と思っているかどうかと、親のきびしさとの間にははっきりとした関連は認められませんでした。「きびしい」親が減少したのは、親が自信をなくして「きびしくできなくなった」からではなく、ほかに理由があるように思われます。以下でその点について詳しくみていくことにしましょう。



居心地のよい家庭

考えられる理由の1つは、親子間の対立が少なくなったということです。「生活の中で子どもと意見が合わないこと」は何かという質問をみると、図2のよう

図2 子どもと意見が合わないこと (複数回答) %



※1～3 82年は「テレビの番組や選び方」「髪のかっこう」「電話のかけ方」

に82年と比べて減っている項目が目立ちます。最も減り方が大きいのは「テレビ番組の選び方」ですが、これには家庭のテレビ台数が増え、見たい番組があるときは別のテレビでも見られるようになったこともあるのでしょうか。しかしそれ以外にも、「言葉づかい」や「髪形」で意見が合わないという人が大きく減っており、子どもと意見の合わないことが、全体に減少傾向にあることがわかります。

さらに、子どもに対して親が手をあげること20年前に比べ少なくなっています。父親に「なぐられたことがある」中高生は82年の43%から24%になっていますし、母親に「なぐられたことがある」中高生も28%から20%になっています。

中高生の側でも、「家にいると楽しいことが多い」と答えた子どもが92年の64%から今回71%に増加しています（82年、87年にはこの質問はない）。男女別、中学・高校別にみても「楽しいことが多い」は6割を超えていて、多くの中高生にとって家庭は居心地のいい場所となっているようです。



接近する親子の意識

このように親子の対立が少なくなった背景には、親の意識面の変化があります。過去に親と中高生で意識に大きな差があった項目でも、その差が小さくなり、親子の意識が近づいている傾向がみられるのです。

親と中高生の両方に対し、生活の目標を尋ねた質問の結果をみてみましょう。この質問では「その日その日を自由に楽しく過ごす」「しっかりと計画を立てて豊かな生活を築く」「身近な人たちと過ごやかな毎日を送る」「みんなと力を合わせて世の中をよくする」の4つの中から、生活の目標に近いものを1つ選んでもらっています。このうち、「自由に楽しく」と「過ごやかな毎日」の2つは今の生活を重視する「現在中心」の考え方、「しっかりと計画」と「世の中をよくする」の2つは将来の結果に重きを置く「未来中心」の考え方です。図3で「現在中心」の20年間の変化をみると、中高生では一貫して「現在中心」の考え方が多数を占めていますが、親のほうはこの20年で「未来中心」が減少して「現在中心」の考え方をする人が増えてきており、中高生と親との間の意識の違いがしだいに小さくなりつつあります。

同じように、親の意識が中高生に接近する傾向は、未婚の男女関係について聞いた質問にも表れています。未婚の男女は「結婚式がすすまでは性的まじわりをすべきではない」と答えたのは、82年には高校生で23%だったのに対して、父親は49%、母親は61%で、親子の意識には大きな違いがありました。そして、このような厳格な考えをもつ高校生は2002年には10%に減少しましたが、親ではそれ

図3 「現在中心」の生活目標

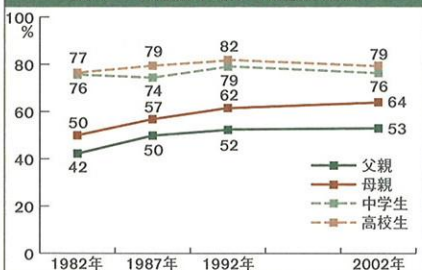


図4 どういう親でありたいか

父親		母親	
友だちのような親	権威のある親	友だちのような親	権威のある親
A 60%	40%	A 83%	17%
自由を尊重する親		指導注意する親	
B 83%	16%	B 79%	21%
言い分を聞く親		甘やかさない親	
C 83%	17%	C 88%	12%

以上に大きく減少し、2002年では父親15%、母親16%と、中高生とあまり違いがなくなっています。



子どもを尊重する親

親がきびしくなくなってきた理由としてもう1つ考えられるのは、子どもを1人の個人として認め、自主性を尊重する考えが浸透してきているということです。

図4は親が考える「理想の親」を聞いた結果です。この質問では、日ごろ子どもに対してどういう親でありたいと思っているかを、図4に示したような3組それぞれについて答えてもらっています。まずAの「何でも話し合える友だちのような親」か「子どもに尊敬されるような権威のある親」かという質問では、父親の60%が「友だちのような親」と答えており、「権威のある親」の40%を上回っています。母親では「友だちのような親」が83%と、父親よりさらに多くなっています。Bの「できるだけ子どもの自由を尊重する親」か「できるだけ指導や注意をおこたらない親」かでは、父親の83%、母親の79%が「自由を尊重する親」でありたいと答えています。Cの「子どもの言い分を聞いてやる親」か「子どもを甘やかさないきびしい親」かについては、「言い分を聞く親」が父親の83%、母親の88%でした。

多くの親が子どもを何かにつけ注意したりきびしくしつけたりするよりも、子どもと対話をし、子どもの自主性を尊重することを理想と考えていることがわかります。特に「自由を尊重する親」と「言い分を聞く親」は、82年の調査でもすでに多数を占めていましたが、父母ともに20年間でさらに増加しています。



子どものことは子どもに

さらに、このような意識は単に「理想の親」だけではなく、実際の子どもの関係の中にもうかがうことができます。親が子どもの友人関係についてどんな方針をとっているかでは、「子どもの自由にまかせている」という親が82年の36%から50%に増えています。そしてそれにとってもなつて「好ましくないときは注意する」が50%から42%に、「いつも助言したり

注意したりしている」が8%から3%に減少しています。その結果、2002年は「子どもの自由にまかせている」という親のほうが、「好ましくないときは注意する」という親よりも多くなっています。

将来のことも、「できれば子どもと一緒に住みたい」という親は調査の回を追うごとに少なくなっています。82年には父親で74%、母親で69%と7割前後の親が「一緒に住みたい」と答えていたのが、2002年には父親で58%、母親で44%と半数程度になっています。

将来子どもについてももらいたい職業をたずねた質問（自由回答）では、「本人が希望する職業なら何でもよい」や「子ども自身が決めること」といったような、将来のことは子どもにまかせるという主旨の回答が過去に比べ増加しています。自分は自分、子どもは子どもという意識がしだいに浸透しつつあることを示す結果だといえるでしょう。



学校にきびしさを求める親

全体として、親子関係のあり方は子どもを尊重するようになり、親が子どもにきびしく注意する場面も少なくなっています。しかし、家庭ではあまりきびしくない親が、学校にはきびしさを求めているという面もあります。

たとえば「社会のルールやマナー」や「他人を思いやる心」といった、基本的なしつけに近いことがらを学校に期待する親が4割から6割程度います。学校の校則についても、「きびしいほうがよい」と「どちらかといえばきびしいほうがよい」を合わせると7割以上になり、多くの親が学校にきびしさを求めています。しかも「きびしいほうがよい（どちらかといえば含む）」という親は92年までは減少していましたが、今回は92年から増加しています。

子どもに社会のルールを教えたり、時にはきびしく接することも必要だということは親も感じているようです。それを学校にまかせることによって居心地のよい家庭を維持しようとするのか、それともその役割を自ら担おうとするのかかが問われているのではないのでしょうか。

詳しくは『放送研究と調査』1月号をご覧ください。■